

「面影」に関わる心理的過程

大 原 貴 弘

「子どもの頃の面影がある」や「昭和の面影が残る町並み」など、「面影」という言葉は、日本において古くから用いられてきた。そして「面影」は、目の前にある人物や風景などを見たときに、記憶や心的イメージ、感情・情緒などが喚起される複合的な心理機能が関わった概念といえる。しかしながら、「面影」に関わる心理的過程は、これまで心理学の観点から直接的に検討されてこなかった。

本稿では、「面影」を、心理学の観点からどのように把握し、理解できるかについて考察してゆく。まず、面影の辞書的意味や文化間比較について概観した後、「面影」の心理的過程に関わる心理学知見を取り上げ、その心理的過程の特性について考察する。

1. 「面影」とは何か？：「面影」の辞書的意味と文化間比較

1.1 日本語表現における「面影」の意味

「面影」は、現存する日本最古の和歌集「万葉集」のなかですでに用いられており、たとえば、現在の福島県南相馬市鹿島区にゆかりのある「陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを（巻三・三九六）」など、全部で14例あるとされる（西野，2018）。

古語における「面影」は、(1)顔つきや(2)幻影、(3)情景や情趣といった意味で用いられている（表1）。古典文学における「面影」の用例について考察した西野（2018）によれば、「万葉集」での「面影」の用例は、「相手が自分を思っているという状況」において立ち現れる「相手の強い思い」という意味であったが、その後、平安時代前期の「古今和歌集」になると、「自分が思うことによって相手の「面影」を自分の元に引き寄せる」状況にも用いられるようになってきたという。つまり、思う側と思われる側の両方の思いが「面影」の形成に関わっていたようである（西野，2018）。

このような意味の遍歴を経て、現在でも「面影」という言葉は、文学表現だけでなく日常会話のなかでも使われている。現代の「面影」の辞書的意味は、(1)実際に目の前にあるように心のなかに浮かぶ顔や姿、(2)あるものを思い起こさせる痕跡や名残、雰囲気といった分類がされている（表1）。このように見ると、古語から現代に至るまでおおそ共通している「面影」の意味は、以下の2つに大別できそうである。

(1) 目の前にあるように思い浮かぶ人物・情景の記憶・イメージ

(2) (記憶・イメージのきっかけとなる) 人物・情景のなかに残る雰囲気、様子、名残

つまり、「目の前にあるように想起される記憶・イメージ」と「そのきっかけとなる眼前の顔や情景」の両方に対して「面影」という言葉は使われている。これは、「面影」が意味するもの

表1 古語、現代日本語、英語およびドイツ語における「面影」の辞書的意味の一例（用例などは除く）

出典	意味
全訳古語辞典 改訂第二版 (学研)	(1) 顔つき。おもざし。 (2) まぼろし。幻影。 (3) 作品の余情として浮かんでくる情景や情趣。 (4) 「面影付(づ)け」の略。連歌・俳諧(はいかい)で、連句の付け方の一つ。故事・古歌などから連想して句を付ける場合、直接は出さずに、それとなくわかるような表現で付けること。
大辞林第三版 (三省堂)	(1) 実際に目の前にあるように心の中に浮かぶ姿・かたち。記憶に残っている顔や姿。 (2) ある物を思い起こさせるよすがとなる印象や雰囲気。
日本国語大辞典 第三版 (小学館)	人の顔や姿、物の様子、情景などで、目の前に実体のないものをさすことが多い。 (1) 目の前にないものが、あるように目の前に浮かぶこと。また、その姿。記憶に残っている姿。まぼろし。幻影。 (2) 顔かたち。顔つき。おもざし。 (3) あるものに似た姿。それを思わせるような顔つき、様子。また、はっきりしない姿。 (4) 姿。様子。特に、想像で思い浮かべられる物事の様子、情景。 (5) 事が過ぎ去ったあとに残されている気配、影響など。なごり。 (6) 歌などで、余情として浮かんでくる姿、情景。 (7) おもかげづけ(面影付)と同じ意味。 (8) 香の名。分類は伽羅(きやら)。香りが蘭奢待(らんじゃたい)を思い起こさせるので名付けられた。
新和英大辞典 第5版 (研究社)	(1) 記憶に残る姿・顔: an image; a (remembered) face (2) 顔かたち: a face; a visage; sb's appearance; sb's looks (3) 跡形: a trace; a vestige; a shadow; a flavor; a hint (4) 過去などを思い起こさせるよすがとなるもの・様子: a reminder
新コンサイス和独辞典 (三省堂)	(1) Bild; das Charakteristische (2) 面ざし: Gesichts; bildung (3) 痕跡: Spur

の所在が明確ではなく、心のなかに思い浮かぶものを指す場合もあれば、目の前の対象のなかに見いだされる場合もあるといえる。

1.2 「面影」に内包される生物学的基盤と文化的規定

では、日本において「面影を感じる」や「面影がある」と表現されるような心理体験は、日本独自のもののなのだろうか。それとも、日本以外の文化圏においても同様の表現があるのだろうか。

たとえば英語では、「面影」に対応する表現は、(1)記憶に残る姿・顔 (image; face)、(2)顔かたち (face; visage; appearance; looks)、(3)跡形 (trace; vestige; shadow; flavor; hint) などに分類される(表1)。また、ドイツ語においても、(1)像、肖像、イメージ (Bild)、(2)面ざし (Gesichts)、(3)痕跡 (Spur) など、おおよそ英語と同じような分類となっている。なお、心理学の学派の1つであるゲシュタルト心理学の Gestalt もまた、形や形態といった意味に加えて、「面影」に類する意味を持っているようである(松岡, 2018)。

以上のように、「面影」と直接対応するわけではないが、「面影」に内包される先述の2つの大意、つまり「想起される表象・イメージ」と「眼前の対象のなかに残る痕跡・様子」のそれぞれに対応する表現は日本語以外にもある。したがって、日本において「面影」と表現される主観的体験は、日本人独自のものというわけではなく、ある程度は人類全般に共通するものといえそうである。

ただし、日本語の「面影」に内包される2つの意味（「想起される表象」と「眼前の対象」）は、（英語、ドイツ語など）日本語以外ではそれぞれ別の言葉が用いられる場合も多い。言い換えれば、日本以外の文化圏ではそれぞれ別の意味合いを持つ概念が、日本では「面影」という1つの概念のなかに包括されているといえる。松岡（2006）は、脳裏に浮かぶ像が「ある」状態と「ない」状態の間で移ろうものとして「面影」を捉えるところに日本の独自性があると論じている。つまり、日本における「面影」は、「眼前の対象」あるいは「想起された表象」のどちらか一方のみを意味するのではなく、その両者の間で移ろう不明瞭な心理表象を意味しているのではないだろうか。

ところで、入戸野（2009）は、「かわいい（kawaii）」という日本独自の文化・概念を心理学的に捉える上で、九鬼周造が「いきの構造」（1979）で採用した手法に注目している。九鬼（1979）は、「いき」という日本特有の概念に内包される構造として、「媚態」、「意気地」および「諦め」の3つを挙げている。そして、このうち「媚態」は異性との関わりを示す「通文化的・生物学的現象」であり、そこに、「意気地」と「諦め」という日本の独自色の強い「民族的・歴史的色彩」が加わることで、「いき」が成立したと論じている。入戸野（2009）は、九鬼が「いき」を考察する際に採用した「文化的色彩の強い日常語を生物学的基盤と文化的規定の二層構造として分析する手法（入戸野、2009）」は、「かわいい」を理解する上でも有効であると考察している。そして、この観点は「面影」について考えるときにも有効であろう。つまり、「眼前の対象に誘発された記憶表象の想起」という人類共通の生物学的基盤に基づいた心的機能に、「眼前の対象と記憶表象の間での移ろい」という日本独自の色彩がついたものが「面影」といえる。

1.3 本稿での「面影」の定義

本稿では、「面影」を特に「眼前の対象のなかに残る雰囲気・痕跡をきっかけにして、今は眼前にない（かつてはあった）対象の記憶表象が想起され、眼前の対象と想起表象間の類似性が評価される心理的過程」という意味で捉え、それを心理学の観点から考察してゆく。

次節以降では、特に人物の顔に「面影」を感じる心理的過程に焦点を当て、まず（1）今は目の前にない（不在の）対象に思いを馳せる心理的過程を「不在の認知」と捉え、それに関わる心理学的知見を取り上げる。ついで（2）人物の顔の同定処理について、特に、既知顔の認知や、類似した顔の認知などに関わる心理学的知見を取り上げた上で、「面影」に関わる心理機能との比較を行う。さらに、（3）「面影」に関わる心理機能の特性をまとめた上で、「面影」を心理学的に捉える上での今後の課題と展望について考察してゆく。

2. 「不在の認知」の一形態としての「面影」

私たちが人物の顔や風景に「面影」を感じるとき、そこに残る名残や痕跡をきっかけに「今そこにはないもの」や「かつてあったもの」に思いを馳せることがある。つまり、私たちは眼前に実在する対象だけを認識しているのではない。今日の前には存在しない対象についても、「かつてはあったもの」あるいは「本来あるべきもの」として認識している。そして「今はないもの」を想起し、目の前の視空間にその想起像を投影したり、その対象が「かつてあった場所」に注意を定位したりすることがある。ここでは、このような心理的過程を「不在の認知」として捉え、その心理的過程に関わる2つの知見を取り上げる。

2.1 ヒトの乳幼児とチンパンジーの描画比較：「そこにはないもの」を補完する

ラスコー洞窟やアルタミラ洞窟など、数万年前の人類は洞窟の奥深くにウシやウマ、シカなどの絵を生き生きと描き残した。これらの絵は、当時の人類が「(かつて見たことがあるが)今は目の前にいない対象」に思いを馳せ、それを洞窟内の壁や天井に描いたものである。このような「今はないもの」を外在化するために必要な心理機能が「不在の認知」といえる。そして、このような認知機能はヒトに特有のものである可能性がある。

齋藤(2014)は、ヒトの乳幼児とチンパンジーの描画比較研究を行っている。ヒトだけでなく、チンパンジーもまたペンや筆のような画材を渡すと描画することが知られている。齋藤の研究では、(チンパンジーなどの)顔の線画が用いられたが、この線画には(片方の目など)一部描かれていない部分があった。このような一部欠損のある線画をチンパンジーとヒトの乳幼児(1～3才)に提示し、画材を渡すと、チンパンジーとヒトはそれぞれどのような描画をするかが比較された。

その結果、チンパンジーは線画内の顔の輪郭や顔部品など目立つ箇所を上からなぞったり、顔全体を塗りつぶしたりといった、描かれて「ある部分」に描き込みをすることが多かった。それに対して、ヒトの乳幼児の場合は、2歳半以降になると、(目が描かれていない)欠損部分にグリグリと目のようなものを描き入れるといった、描かれて「ない部分」を補完するような反応をすることがわかった(齋藤, 2014)。

齋藤の共同研究者でもある松沢(2011)は、長年のチンパンジー研究を踏まえて、このような「ないもの」を想像する能力はヒト特有の能力であると論じている。チンパンジーと異なり、ヒトは「ない」ということを認識し、「本来あるはずのもの」や「かつてあったもの」を想像し、それを目の前の空間に補完するような働きかけをする能力を進化の過程で獲得した。このように、ヒトは「あるもの」だけでなく、「ないもの」、つまり「不在」という状態もまた認識の対象とする。

2.2 Looking at Nothing 現象：「今はないもの」に目を向ける

さらに、「不在の認知」の影響は、眼球運動のような身体定位反応にも現れる。たとえば、数人でテーブルを囲んで会食しているところを想像してみよう。会話の最中に、そのなかの1人が

席を離れたとする。残された人たちの会話のなかで、席を外している人物の話題になったとき、私たちは、その人物がさっきまで座っていた席をチラッと一瞥して話することができる。これは実際に眼球運動を測定した心理学実験においても確認されており、「Looking at Nothing 現象」と呼ばれる (e.g., Altmann, 2004; Ferreira, Apel, & Henderson, 2008; Hoover & Richardson, 2008; Richardson & Spivey, 2000)。

たとえば、Hoover & Richardson (2008) の実験では、モニタ上に、動物のキャラクターが地面の下を掘り進んでくる様子が提示される。その後、キャラクターは画面上のある地点まで来ると、そこにある穴から顔を出し、何らかの事実（「シェイクスピアの最後の演劇はテンペストであった」など）を喋ってからまた地中に隠れる。一方、(見た目は同一だが) 別のキャラクターは、他の穴から顔を出すものの、何も喋らず、そのまま地中に隠れる。これが4回、繰り返され（そのうち、事実を喋るキャラクターは2回）、最後にそれぞれのキャラクターが隠れた4つの穴だけが、画面に残される。このあと、実験参加者は、キャラクターが喋った事実に関して質問され、Yes / No での回答が求められるのだが、質問に回答する際の目の動きを測定したところ、実験参加者は質問に関する事実を喋ったキャラクターが隠れた穴を長く注視する傾向があることがわかった。

このような現象は、なぜ生じるのだろうか。私たちが何かを記憶する際、単にその事象や対象の「視覚的特徴」のみを覚えるのではなく、その事象・対象があった「場所」に関する情報も統合して記録する。そして、その事象・対象を想起する際には、その場所情報も同時に想起され、その場所に視線が定位してしまうために、この現象が生じるのではないかと考えられている (Ferreira, et al., 2008)。その対象がかつてあった場所に目を向けることで、記憶想起が促進されるか否かについては、見解が一致しているわけでない (Ferreira, et al., 2008)。しかし、いずれにせよ私たちは、今は存在しない対象がかつてあった場所に視線を向けるといった「不在の認知」に基づいた身体定位反応をする。

私たちは、人物の顔や風景のなかに残る痕跡や名残を目にしたとき、今は存在しないかつての「面影」を思い描いたり、探し求めようとしたりする。このような「面影」の認知は、ヒトが進化の過程で獲得した「不在」を認知する能力の一形態と捉えることが可能ではないだろうか。

3. 人物の顔に「面影」を感じ取る心理的過程

私たちが「面影」を感じる対象として多いのは、人物の顔・容貌であろう。人の顔に「面影」を感じるとは、眼前の人物の顔を知覚して、その人物の異年齢時の顔や、その人物と血縁関係のある人物の顔に関する記憶表象を想起し、両者の類似性を評価するといった一連の認知処理に基づいていると考えられる。では、このような「面影」の認知処理には、どのような処理特性があるのだろうか。本節では「面影」に関わる顔認知についての研究知見を概観してゆく。

3.1 既知顔・未知顔の同定処理

私たちが「面影」を感じる顔は、基本的には、知り合いや有名人など、これまで何度も目にし

てきた馴染みのある人物の顔である。顔認知の心理学研究では、馴染みのある人物の顔は「既知顔(familiar face)」と呼ばれる。一方、初めて目にする馴染みのない人物の顔は「未知顔(unfamiliar face)」と呼ばれる。そして、既知顔と未知顔とでは、その処理特性が異なることがわかっている(e. g., Bruce, 1982; Burton, Bruce, & Hancock, 1999; Jenkins, White, Van Montfort, & Burton, 2011)。

たとえば、Jenkins, et al. (2011) は、実験参加者が馴染みのない複数の未知顔からなる写真40枚を提示し、それらを同一人物ごとに分類するよう求めた。実はこの写真群はわずか2名の人物のスナップ写真から構成されていたのだが、参加者はこれをおおよそ7つの写真群に分類した。つまり、2名の未知顔を7名の異なる人物として認識したことになる。ところが、実験参加者が馴染みのある既知顔の写真で同様の実験を行ったところ、ほぼ正確に2つの写真群に分類できた。したがって、未知顔に比べて既知顔の認識能力は非常に頑健であり、顔の角度や表情、髪型、髭の有無、照明の当たり方など様々な属性が変化している場合であっても、同一人物として正確に同定できるといえる。

なお、既知顔と未知顔では、再認する際の手がかりとなる視覚的特徴が異なることもわかっている(e.g., Campbell, 1999; Ellis, Shepherd, & Davies, 1979; Young, Hay, McWeeny, Flude, & Ellis, 1985)。これらの研究からは、既知顔を再認する場合には、目や口といった内部特徴が再認の手がかりとなり、未知顔の場合には、髪型や輪郭などの外部特徴もまた、内部特徴と同程度に手がかりとなりうることを示されている。

さらに、平岡(2005)は、既知顔と未知顔の記憶表象では、その示差性(distinctiveness)の記憶のされ方にも違いがあることを明らかにしている。示差性とは、細い目やあぐらをかいた鼻、角張った輪郭といった、その人物らしさを示す視覚的特徴のことである。平岡の研究の結果、既知顔の記憶表象は、特に内部特徴の示差性が強調された形で記憶されている可能性が示された。つまり、馴染みのある顔は、その人特有の目鼻立ちが誇張された形で記憶されていることになる。

先述のように、「面影」を感じる顔は、基本的には既知顔である。ある人物の顔を、さまざまな状況下(角度や表情、髪型、年齢など)で何度も繰り返し見るなかで、その人物の顔についての頑健な記憶表象が形成される。そしてその記憶表象は、髪型や輪郭といった外部特徴よりも、目鼻立ちといったその人物を特徴づける内部特徴が強調した形で記憶される。その記憶表象は、眼前の顔と比較されることで、「目元や口元に面影がある」といった「面影」の認知が生じるのだろう。

3.2 同一人物の年齢の異なる顔や血縁関係のある人物の顔の同定

日常生活のなかで、他者の顔に「面影」を感じる主な状況は2つある。1つは、同級生に久しぶりに会ったときや有名人の子どもの頃の写真を見たときのように、同一人物の年齢の異なる2つの顔の間に類似性があったときである。もう1つは、親子のような血縁関係のある人物同士の間にも類似性があったときである。ここでは、このような状況における顔認知の処理特性について見ていく。

まず、同一人物の経年変化した顔の同定にはどのような特性があるのだろうか。Bruck,

Cavanagh, & Ceci (1991) は、卒業から 25 年後の同窓会に参加した人物の顔写真を撮影し、その写真を同窓会に参加しなかった卒業生に見せ、高校時代の顔写真との照合課題を求めた。その結果、現在の顔と高校時代の顔を正しく照合できた割合 (49%) はチャンスレベル (10%) よりも有意に高かった。一方、高校の卒業生ではない参加者に、同じ刺激群で照合を求めたときの正答率 (33%) もチャンスレベルよりは高かったものの、卒業生たちに比べると有意に低かった。したがって、このような年齢の異なる同一人物の同定能力においても、既知顔認知の頑健性が示されている。発達に伴う骨格の変化や皺の増減などがあっても、それがもともと馴染みのある顔 (既知顔) の場合には特に、その視覚的類似性に基づいて同じ人物として認識する能力を私たちは有している。そして、そのような類似性が検出できたとき、私たちはそこに「面影」を感じ取っている可能性がある。

さらに、2 人の人物の間に血縁関係があるか否かの認識も、顔の視覚的特徴を手がかりにして、ある程度正確にできることがわかっている (e.g., Arantes & Berg, 2012; Brédart & French, 1999; Nesse, Silverman, & Bortz, 1990)。Brédart & French (1999) は、子ども (1、3 あるいは 5 歳) の顔写真 1 枚と 3 人の成人男性 (あるいは女性) の顔写真を実験参加者に提示し、3 枚の成人の写真のなかから子どもの実父 (母) の写真を選ばせた。この実験で用いられた顔写真は、実験参加者が馴染みのない未知顔であったが、その正答率はチャンスレベルよりも有意に高かった。したがって、たとえ未知顔であっても、人物間の視覚的類似性に基づき、血縁関係の有無を認識する能力も私たちは持っている。そして、このような類似性もまた、私たちは「面影」として感じ取っているのではないだろうか。

以上のように、私たちは、経年変化した顔を同一人物の顔として認識することや、血縁関係ある人物同士を照合することが、ある程度正確にできる。これらの能力は、2 つの顔の間にある何らかの視覚的類似性の検出に基づいていると考えられる。ではこのような類似性の検出は「面影」に関わる心理的過程とどのような関係があるのだろうか。次では、この点について考察したい。

3.4 顔認知処理と「面影」の認知処理の違い

ここまで概観してきたように、既知顔に対しては、既知顔の知覚情報と記憶表象の間の類似性を手がかりとすることで、年齢の異なる顔を同じ人物として同定したり、人物同士の間血縁関係を認識できたりする。では、このような処理過程と「面影」を感じる処理過程は、同一といえるだろうか。両過程はかなりの部分が共有されているが、同一の過程とはいえないだろう。むしろ既知顔の認知処理が済んだあとに、「面影」独自の認知処理が始まると考えられる。

Bruce & Young (1986) による顔認知の情報処理モデルでは、眼前の顔の知覚情報が記憶と照合され、その顔が既知顔であるか否か判断される。それが既知顔の場合には、その後、その人物情報 (名前など) の検索が行われ、それが誰であるかという人物同定がなされる。一方、「面影」を感じるとき、その人物の個人識別はすでに済んでいる場合が多い。「写真の人物が誰だったか思い出せないが、誰かの面影は感じられる」という場合もないわけではない。しかし多くの場合、「○○の面影がある」と具体的な人物が特定された上で、「面影」は認知される。したがって、既知顔の人物同定が行われたあと、「面影」の認知が行われるという順序関係があると考えられる。

そして、「面影」の認知は、人物同定後の、視覚像と記憶表象の間の類似性の評定に規定された処理といえる。「面影」は、視覚対象と記憶表象間の類似性が低すぎる場合にも高すぎる場合にも感じられない。たとえば、まったく異なる(類似度の低すぎる)顔同士の間「面影」を感じることはない。また、人物Aの幼少期の写真に今のAの「面影」を感じることはあるが、昨日撮影されたばかりの(類似度の高すぎる)写真のなかに今のAの「面影」を感じることはない(それは単に「Aの写真」と判断されるにすぎない)。「面影」は、まったく異なるのでもなく、まったく同じでもない、どこことなく似ているところがある場合に感じられる。

つまり、「面影」を感じる顔とは、既知顔の記憶表象との類似成分と、記憶のなかにない差異成分が混じり合った顔といえる。そして、この2つの成分が混じり合った様を、私たちは「(眼前の対象に残る)雰囲気や様子、名残」といった、言葉で表現しきれない不明瞭な対象として表現しているのではないだろうか。このような、類似成分と差異成分が揺らぎながら検出される心理的過程が「面影」の認知といえる。

さらに、この2つの成分は、「面影」を感じる顔に対する魅力にも影響を及ぼしている可能性がある。馴染みのある刺激に対して感じる、親しみやすさや懐かしさのような魅力は「親近性(familiarity)」と呼ばれ、初めて見る刺激に対して抱く、目新しさや新鮮さのような魅力は「新奇性(novelty)」と呼ばれる(Liao, Yeh, & Shimojo, 2011)。Liao, et al. (2011)は、顔写真、風景写真および幾何学図形のそれぞれに対する魅力は、親近性と新奇性どちらの効果が強いかを検証した。その結果、親近性の効果は人物の顔において顕著であり、新奇性の効果は風景において重視されることを明らかにしている。

先述のように、「面影」を感じる顔とは、類似成分と差異成分が入り混じった顔といえる。そして、その2つの成分が揺らぐように認知される過程のなかで、類似成分が強まれば、親近感や懐かしさといった情緒が高まり、逆に類似成分が弱まれば(差異成分のほうが強まれば)、喪失感や寂しさといった情緒が喚起されるのかもしれない。そして、このような類似性評価に伴う情緒の揺らぎもまた、「面影」の認知の特徴とはいえないだろうか。

3.5 「面影」に関わるボトムアップ処理とトップダウン処理

認知心理学では、眼前の知覚情報を認識する際には2つの処理があると考えられている(Neisser, 1976)。1つは、眼前の知覚情報を詳細に分解・分析し記憶情報と照合してゆく処理で、ボトムアップ処理(データ駆動型処理)と呼ばれる。もう1つは、これまでの経験から記憶内に蓄積された知識を駆使して認識してゆく処理で、トップダウン処理(概念駆動型処理)と呼ばれる。

この2つの処理は、「面影」の認知についても当てはまると考えられる。眼の前の対象のなかに類似成分が強く見出される場合には、ボトムアップ処理が優先となり、それを受動的に認知したときに、私たちは「面影がある」や「面影が残る」といった表現を用いることになる。一方、眼の前の対象のなかに類似成分が少なければ、トップダウン処理が優先され、眼前の対象のなかに記憶表象を投影したり、類似成分を探索したりすることになる。そして、こういった能動的な認知をしたとき、私たちは「面影を重ねる」や「面影を求める」といった表現を用いることになる。

もう一つ、トップダウン処理を促進しうるのは、感情や欲求の影響である。古典表現から現代

に至るまで、「面影」喚起の重要な要因となるのは、今はもういない人に対する恋愛感情や切望感、喪失感である。このよう感情や欲求が強い場合は、トップダウン処理が優先され、目の前にその痕跡や名残がない場合であっても、「面影」が想起されやすくなると推察できる。

「面影」を用いた表現のなかに、「面影がある」や「面影が残る」といった受動的な表現と、「面影を重ねる」や「面影を求める」といった能動的な表現があることの背景には、このような「面影」に関わる2つの認知処理の影響が考えられる。

4. 「面影」に関わる心理的過程の特徴と今後の課題・展望

本稿では、「面影」に関わる心理機能について考察してきた。最後に、これまで取り上げた「面影」に関わる心理的過程の特徴に関する仮説について振り返った後、「面影」を心理学的に検討する上での今後の課題と展望についてまとめる。

4.1 「面影」の心理的過程の特徴

これまで取り上げた「面影」に関わる心理的過程の特徴に関する仮説は以下の通りである。

- (1) 「面影」とは、「眼前の対象に誘発された記憶表象の想起」という生物学的な心理機能に、「眼前の対象と記憶表象の間での移ろい」という日本独自の文化的規定が加わった概念といえる。
- (2) 「面影」の認知は、「今はもうない事象」や「かつてあった事象」などを認識の対象とする「不在の認知」という、ヒトが進化の過程で獲得した認知機能に基づいている。
- (3) 「面影」を感じる顔は主に既知顔であり、同一人物の異なる年齢の顔や、既知顔と血縁関係のある人物の顔などに対して感じることが多い。
- (4) 「面影」を感じる時に想起される顔の記憶表象は、髪型や輪郭といった外部特徴よりも、目鼻立ちといった、その人物を特徴づける内部特徴の示差性が強調される傾向がある。
- (5) 「面影」の認知は、既知顔の人物同定が行われた後の、視覚対象と想起表象の間の類似性評定に規定されている。
- (6) 「面影」を感じる顔とは、記憶内の既知顔との類似成分と、記憶内にはない差異成分が混じり合った顔といえる。
- (7) 眼前の対象と記憶表象の間に類似成分が検出されれば親近感や懐かしさなどの情緒が喚起され、差異成分が検出されれば喪失感や寂しさなどの情緒が喚起される。
- (8) 「面影」の認知には、目の前の視覚対象内の類似成分に依存したボトムアップ処理と、心のなかの記憶表象に依存したトップダウン処理がある。

4.2 「面影」の主観的体験の特性

本稿で取り上げてきた顔認知研究の多くは、顔の同定課題や再認課題の成績を従属変数としていた。しかし、「面影」を感じる心理的過程とは、既知顔の同定処理を経て意識上に顕在化された類似性評価や情緒喚起からなる「主観的体験」である。したがって、「面影」認知の機能特性を解明するには、「面影」をどのくらい感じるかといった主観的評価を従属変数とする課題を取

り入れる必要がある。そのためには、「面影」の主観的評価を構成する因子構造（「類似性」や「情緒」などが考えられる）について検討することが有効であろう。

また、「面影」の主観的体験が、人類共通の生物学的基盤に基づいた心理機能と日本独自の文化的規定が加わった概念であるならば、「面影」の主観的評価の文化間比較を試みる必要もある。

4.3 「面影」を誘発する外的・内的要因

「面影」を感じやすくする要因としては、外的要因と内的要因のそれぞれが考えられる。

まず、「面影」の認知を促す外的要因としては、本稿で概観したように、顔の内部特徴や示差性の高い視覚的特徴などが挙げられる。また、顔写真に「面影」を感じる場合、写真の不鮮明さや低コントラスト、低彩度などといった画質の特徴もまた、「不在の認知」を誘発し、「面影」に関するトップダウン処理を促進する可能性がある。

さらに、「面影」の感じやすさには、（恋愛感情や喪失感といった）感情・欲求のような一時的な内的要因が影響を及ぼしていると考えられる。また、長期的な内的要因としては、性格特性やイメージ鮮明性などもまた、「面影」の感受性に影響を及ぼしている可能性がある。このような「面影」を感じやすい心的状態や、「面影」を感じやすい人の心理特性を検討することも、「面影」の認知機能を解明する上で有効であろう。

4.4 「面影」による心的変化・効用

人物の顔や風景などに「面影」を感じたとき、その対象に対する印象や魅力はどのように変化するのだろうか。先述のように、眼前の顔のなかの類似成分が多ければ、親近感などのポジティブな印象・感情が喚起され、類似成分が少なければ、寂しさなどのネガティブな印象・感情が喚起されるのではないかと考えられる。

さらに、自然災害などを通して、馴染み深い人物や風景（場所）の喪失体験をした人が、顔や風景の写真を見て、そこにかつての「面影」を感じたり、探したり、それにまつわる思い出を語ったりすることには、どのような心理的効用があるだろうか。このような問題は、「喪の作業」や「グリーフケア」といった臨床心理学的な観点からも興味深い。

本稿では、「面影」という日本古来の概念を、心理学の観点から把握・理解することを試みた。ただし、その多くは仮説の域を出ておらず、今後、実証的研究を通して、「面影」に関わる心理機能の特性を解き明かす必要がある。そこから得られた知見は、認知心理学や臨床心理学など心理学領域に加えて、文学や芸術領域への貢献も期待される。

付記

本論文は、科学研究費補助金（課題番号：18K18697、研究代表者：大原貴弘）の助成を受けた。

引用文献

- Altmann, G. T. (2004). Language-mediated eye movements in the absence of a visual world: The 'blank screen paradigm'. *Cognition*, **93**(2), B79-B87.
- Arantes, J., & Berg, M. E. (2012). Kinship recognition by unrelated observers depends on implicit and explicit cognition. *Evolutionary Psychology*, **10**(2), 147470491201000204.
- Brédart, S., & French, R. M. (1999). Do babies resemble their fathers more than their mothers? A failure to replicate Christenfeld and Hill (1995). *Evolution and Human Behavior*, **20**(2), 129-135.
- Bruce, V. (1982). Changing faces: Visual and non-visual coding processes in face recognition. *British journal of psychology*, **73**(1), 105-116.
- Bruce, V., & Young, A. (1986). Understanding face recognition. *British journal of psychology*, **77**(3), 305-327.
- Bruck, M., Cavanagh, P., & Ceci, S. J. (1991). Fortysomething: Recognizing faces at one's 25th reunion. *Memory & Cognition*, **19**(3), 221-228.
- Burton, A. M., Bruce, V., & Hancock, P. J. (1999). From pixels to people: A model of familiar face recognition. *Cognitive Science*, **23**(1), 1-31.
- Campbell, R. (1999). When does the inner-face advantage in familiar face recognition arise and why?. *Visual Cognition*, **6**(2), 197-215.
- Ellis, H. D., Shepherd, J. W., & Davies, G. M. (1979). Identification of familiar and unfamiliar faces from internal and external features: Some implications for theories of face recognition. *Perception*, **8**(4), 431-439.
- Ferreira, F., Apel, J., & Henderson, J. M. (2008). Taking a new look at looking at nothing. *Trends in cognitive sciences*, **12**(11), 405-410.
- 平岡齊士. (2005). 既知顔と未知顔の記憶表象の差異: 内部特徴と外部特徴の示差性を操作した画像選択課題. 認知心理学研究, **3**(1), 55-63.
- Hoover, M. A., & Richardson, D. C. (2008). When facts go down the rabbit hole: Contrasting features and objecthood as indexes to memory. *Cognition*, **108**(2), 533-542.
- 入戸野宏. (2009). "かわいい" に対する行動科学的アプローチ. 人間科学研究, **4**, 19-35.
- Jenkins, R., White, D., Van Montfort, X., & Burton, A. M. (2011). Variability in photos of the same face. *Cognition*, **121**(3), 313-323.
- 金田一春彦(監修), 小久保崇明(編集). 2014. 学研全訳古語辞典 改訂第二版. 学研教育出版.
- 九鬼周造. (1979). 「いき」の構造 他二篇. 岩波書店.
- 国松孝二(編). (2003). 新コンサイス和独辞典. 三省堂.
- Liao, H. I., Yeh, S. L., & Shimojo, S. (2011). Novelty vs. familiarity principles in preference decisions: task-context of past experience matters. *Frontiers in psychology*, **2**, 43.
- 松村 明. (2006). 大辞林第三版. 三省堂.
- 松岡正剛. (2006). 日本という方法: 面影・うつろいの文化. 日本放送出版協会.
- 松岡正剛. (2018). 千夜千冊エディション デザイン知. 角川書店.
- 松沢哲郎. (2011). 想像するちから: チンパンジーが教えてくれた人間の心. 岩波書店.
- Neisser, U. (1976). *Cognition and reality: Principles and implications of cognitive psychology*. WH Freeman/Times Books/Henry Holt & Co.
- Nesse, R. M., Silverman, A., & Bortz, A. (1990). Sex differences in ability to recognize family resemblance. *Ethology and Sociobiology*, **11**(1), 11-21.
- 西野 翠. (2018). 源氏物語「面影」論:「明石」巻における「面影そひて」をめぐる. 玉藻, **52**, 86-102.
- Richardson, D. C., & Spivey, M. J. (2000). Representation, space and Hollywood Squares: Looking at things that aren't there anymore. *Cognition*, **76**(3), 269-295.
- 齋藤亜矢. (2014). ヒトはなぜ絵を描くのか: 芸術認知科学への招待. 岩波書店.
- 小学館国語辞典編集部. (2006). 日本国語大辞典第三版. 小学館.

渡邊敏郎, Skrzypczak, E. R., & Snowden, P. (2003). 新和英大辞典第五版. 研究社.

Young, A. W., Hay, D. C., McWeeny, K. H., Flude, B. M., & Ellis, A. W. (1985). Matching familiar and unfamiliar faces on internal and external features. *Perception*, **14**(6), 737-746.

（おおはら たかひろ／認知心理学・実験心理学）